佐伯地方のわらべ唄

平川　マサ
（会員・佐伯市城南町）

あれはもう三、四年前になりましょうか。庭のみかんが少し色づき始めた頃でした。知人の紹介で、筑摩書房のセールスマンの訪問があり、「柳田国男全集」の購入を勧められました。

そろそろ夕食の仕度に取りかかろうと思った時刻でもあったのですが、玄関先ではと思い、上ってもらってお話を聞きました。

それにしても、四十一巻という大巻に加えて、二十万近い大金に、ちょっと戸惑いもありましたが、読書好きの娘にいつかは譲れる全集だと考えて、思いきって申込みをしました。

挨拶が済み、セールスマンが広げた三、四頁のゲラ刷りに目を通すと、そこにはわらべ歌があり、一番先に目に入ったのは「かごめ、かごめ」でした。私は、

「ここ佐伯のかごめはちょっと違うんですよ。歌ってみましょうか」

と言って、終りまで歌うと、

「いいですね。もう一度聞かせてくれませんか」

と言うので、繰り返し歌いました。

かごめ　かごめ　かごの中のとりは
いつ出て遊ぶ　夜明けの空に　朝日の光
輝くときは　うしろはだーれ
ひとんこ　ふたんこ　さんめらこ
よって中の　くさつかみ
だれが　あとを　そろえるか
このひとさんが　そろえるよ

うしろはだーれで、うしろの人をつかまえて、その人からひとんこふたんこと、二拍子で指さしてかぞえ、そ

ろえるよで、指された人が鬼になります。

この「ひとんこふたんこ」の部分は、なんとも言えない情緒があり、夕やけの空で歌いたい気持になります。そして、佐伯人のやさしさも伝わってきます。子供の頃の私達は、「くさつかみ」を「くそつかみ」と歌っていました。なんでこんな美しい歌に「くそ」が出てくるのだろうかと、不思議な気持でしたが、それが間違いだと知らず、長い間「くそつかみ」と歌っていたのでした。

間違いといえば、「いちくたいちく」もそうでした。

いちくたいちく　たいのまいのおちょくは
いくたいな　はしのもとの　しょうぶは
だれがうえた　しょうぶか
いったいどの　たいどの　たいがむすめの
かじわら　げんぱちそこのけ　たろざえもんよ

ここでもまた「そこのけ」を「そこぬけ」と間違って歌っていました。子供の頃は、その意味も考えず「底がぬけたのかな」と、とったらしく、その子供らしい発想に笑えてきます。

この唄は、鎌倉幕府の権勢を歌ったもので、尼将軍政子を権勢の第一とするために、一台殿台殿と二つ重ね、次は、比企義員に嫁した台殿の娘、三は梶原源八、四は昔は武士で、後に盲人となった、安明寺太郎左衛門が、お加衆として、頼朝にお伺いするため参上するとき、「そこのけ、そこのけ、太郎左衛門よ」と開けたのを歌ったものだと言います。

それにしても、鎌倉幕府の権勢が、遠く離れた九州で歌われていたということは、頼朝の力が、佐伯の地にまで及んでいたということでしょうか。

「いちくたいちく」の遊びは、冬になると私達姉妹でよく遊んだものでした。円い火鉢の上に握った両手を置き、「いちくたいちく」をみんなで歌い、一番上のお姉さんが握った手を指していき、「たろざえもんよ」で当った手からのけていき、残った者が負けという遊びです。

戦後、佐伯の地によその人達が沢山入って来たせいもあるのでしょうが、それに加えて、マスコミの発達もあり、今では「ずいずい　ずっころばし」を歌っても、「いちくたいちく」を歌う子供達はいなくなりました。

そして、耳で聞いて覚えた歌は、メロディーや歌詞にしても、間違って頭に入ってしまうことがあるようです。亡くなった向田邦子さんも「荒城の月」の中で「めぐる

さかずき」を「眠るさかずき」と覚え込んでいたので、なるたけ人前では歌わないようにしていると、エッセイ集の文中に書いています。同じように「野中のバラ」を「夜中のバラ」と信じ込んで歌っていたという友人のことも書いていました。

それにしても、わらべ唄の歌詞はむづかしい言葉ばかりで、意味があるのだろうかと思うような言葉が多く出てきます。

これは、お正月に羽根をつきながらよく歌った羽根つき唄です。

ひとめにふため　みやこしよめご　いつやにむさし
ななやにやくし　ここのまえで　いったいじや

この歌も、どこか間違えて覚えているのではないかと思いますが、どうでしょうか。

次はまりつき唄です。みんなで大きな輪をつくり、てまりを順に送って遊びました。

おしろのさん　おまさんのざいしょは　いずこで
おかごで　いかさのどん　さしだかどん
どんどとはやるは　どろがみさまか
ここはしなのの　さかえのどん　しのぶかどん
おんがしばらの　よしぞうさん　こまぞうさん
どんどこはやるは　おとはっさん
ひーに　ふーに　みーに　よーに　いつつに
むーに　ななやに　やーに　ここのに　とおーに
東京帰りの　おいもやさん
おいも一升　いくらかえ
三りん二もうでござりまする
もっとまからんか　ちょこりっぽ
おまさんのことなら　まけてやる
ざるおろせ　ますおろせ
ほーちょう　まないた　さしかけて
あたまをきるのは　やつがしら
しっぽをきるのは　とうのいも
とびの行水　からすの行水
はねを　ばたばたして　いったいじゃ

もう一つ、一人で遊ぶまりつき唄があります。

いちもんめの　いすけさん　いのじがきらいで
いちまん　いっせん　いっぴやっこく
いっと　いっしょう
おくらにおさめて　にもんめに　わたした

にもんめの　にすけさん・・・・

とつづき、十匁まで歌います。

ここに「いちもんめ」が出てきます。匁は重さの単位です。昨年でしたか、テレビや新聞をにぎわした「花いちもんめ」というドラマもありました。

ついこの間、近くの公園で小さい子供達がこの「花いちもんめ」の遊びをしていたのに出会い、「ああ、まだこの遊びも残っていたのか」と嬉しくなりました。

梅と桜と合わせてみたら　梅はすいすいだまされた
桜はよいよいほめられた　それいったんおさまった
けんちゃんとりたい　花いちもんめ
みよちゃんとりたい　花いちもんめ
じゃんけんぽん
勝ってうれしい　花いちもんめ
負けてくやしい　花いちもんめ
ふるさとまとめて　花いちもんめ

掘りおこせば、次から次と、昔歌った佐伯のわらべ唄が、おもしろい程出てくるのです。お手玉を持てば今でも歌えます。

おしゃら　おひとつおひとつおとして　おしゃら
おふたつ　おふたつおとして　おしゃら
おみなおとして　おしゃら
おてしゃん　おとして　おしゃら
てばさみ　おとして　おしゃら
おちりんこ　おとして　おしゃら
おひだり　おひだり　なみわかれ
しもつけ　なかつけ　さうしのてぬぐいほうかぶり
おんぼし　おんぼしまねいて　おしゃら
手たたき手たたき　お手たたき　もう一度おしゃら
おってんぐし　おとして　おしゃら
ももだしばったん　おとして　おしゃら
小さい川　渡れ　渡っておとして　おしゃら
大きい川　渡れ　渡っておとして　おしゃら
おふたつ　まねき　おとして　おしゃら
おくさんでんぽう　だんなさんでんぽう
おとして　おしゃら
きりこ　おとして　おしゃら

こうして並べてみますと、わらべ唄というのは、はっきりとした意味もなく、わらべ唄ことばとして、響きのあることば遊びではないのでしょうか。

あれはもう何年前になりましょうか。東京に住んでいる孫が、まだ保育園に通っていた頃、上京した時に、運よくその運動会にめぐり合わせたことがありました。

この保育園は、自由学園系の保育園で、その日は、学園の先生方が多勢応援に来ていました。園児達の遊戯は全部わらべ唄というのには驚いてしまいましたが、あの時の歌声は、まだ今でも耳に残っています。そして、近所に迷惑がかかるからと、マイクロホンも使わず、先生方のわらべ唄の大合唱でした。

その当時、孫はわらべ唄ばかり歌っていたのですが、その孫も今はもう五年生になりました。孫から教わったわらべ唄の中で、一つだけ、今でも覚えている唄があります。

ぴいひょろ　ぴいひょろ　さんだいし
月くり　火くり　水よう日
木くり　金とき　土だらけ　日よう日
おわりの神様　さんだいし

（孫は、あの頃歌っていたわらべ唄を、今でも覚えているといいな。今度帰ってきた時、歌ってもらおう）。

それにしても、今の子供達は、わらべ唄などあまり歌わなくなってしまったようです。これは、次の世代、そしてまた次の世代に伝えなかった私達に責任があるのかもしれませんが、音域も三音から五音という単純なメロディーに魅力がなくなり、テレビから流れてくる歌の方に、子供達が引かれていったのでしょうか。

それでもやはり、佐伯のわらべ唄は残しておきたいというのが私の思いです。

筑摩書房のセールスマンは、ひざを正して「長いことおじゃましました。勝手なお願いで誠に済みませんが、お別れにもう一度佐伯のかごめを歌ってくれませんか」と言うので、私も嬉しくなって三度目を歌いました。

セールスマンを玄関まで送って出た時、「テープを持ってくればよかったなあ」と、小さな声でひとり言を言いながら靴をはいていました。

秋の日は暮れやすく、外はもう、とっぷりと暮れていました。

かごめかごめ

かーごめ かごめ かごのなかの とりは

いつでて あそぶ よあけの そらに

あさひの ひかり かがやく ときは

うしろは だ―― れ

ひとんこ ふたんこ さんめうこ

よーって なーかの くさつかみ

だーれが あーとを そろえる れ

このひと さんが そろえる よ